



中山間地における生物多様性の活用と可能性

日本各地で受け継がれてきた伝統的な農林業活動を中心とする「里山暮らし」の消失に伴い、里山における生物多様性の損失が進行しています。これを防ぐため、里山暮らしの継承や再生が望まれるものの、人口減少時代に突入した我が国において、消失しつつある暮らしの再生は難しいのが現状です。一方で近年、持続可能なライフスタイルに対する市民の関心が世界的に高まりつつあります。里山暮らしの生物多様性保全効果に着目し、その価値を広めることが、里山暮らしの復権と、里山生態系の継承・再生につながる可能性があります。

国土の約7割を占める中山間地域で営まれてきた農林業を中心とする人の営みは、里山景観の豊かな生物相を育み、国土の保全にも貢献してきました。しかし、高度成長期以降、里山で続けられてきた伝統的な活動（暮らし・生業）が消失し、それにより維持されてきた生物多様性や生態系サービスが失われつつあります。このような人の働きかけの縮小による生態系の劣化を、「生物多様性第2の危機」として生物多様性国家戦略で言及して20余年、人口減少社会を迎え、2050年までに国土の5割超が無居住化すると予測される状況下において、この状況が改善される兆しはありません。健全な里山生態系を次世代に引き継ぐための有効な策はないのでしょうか。

好機の一つとして考えられるのが、持続可能なライフスタイルへの関心の高まりです。持続可能な開発目標（SDGs）の認知度の向上に伴い、我が国においても持続可能な企業や商品を支持する市民の割合が7割

近くに達しています。ヨーロッパやアジアをはじめとする諸外国においても、環境に配慮した購買行動を起こす市民が増えています。令和4年（2022年）には、持続可能な食料システム構築に向けた「みどりの食料システム戦略」が策定され、環境にやさしい農業経営をはじめとする事業者の持続性確保に向けた努力と工夫に対する理解を深め、持続性を重視した消費を拡大することが目指されるようになりました。

この流れは、その土地の風土の中で培われてきた自然資源と伝統知を活用してきた里山暮らしにとってはチャンスです。世界的に持続可能な農林業への関心が高まる現在、里山で営まれてきた農林業が、その生産活動を通じて生物多様性を育み、保全に寄与してきたことを示すことの訴求効果は大きいと考えられます。

里山暮らしの生物多様性保全効果に焦点を置いたブランド化の事例として、世界農業遺産に認定された「静岡の茶草場農法」があります。ここでは、「トキ」や「コウノトリ」などの生き物を「売り」にするのではなく、茶葉生産に伴う、「草地の管理」という活動の生物多様性保全効果を「売り」にすることで、年間15億円を売り上げています。

持続可能な取り組みに対する市民の選好が見込まれる社会においては、里山暮らしの生物多様性保全効果や、文化的・歴史的な価値を広めることで、里山暮らしを生業として選択し、受け継ぐことのできる社会を実現できるかもしれません。（小林 慶子／自然環境部）

写真1 里山の生態系維持に役立っている。草を刈り、利用することは、



認定区分	認定表示
5~25%未満	
25~50%未満	
50%以上	



図 静岡の茶草場農法実践者認定制度で用いられる認定区分と認定表示。経営する茶園面積に対する茶草場（草地）管理面積を、生物多様性保全貢献度として示している。



写真2 適度に草刈りをされる田んぼのあぜに絶滅危惧種のキキョウが咲く（長野県泰阜村）